

C— 7 土間生活の変化について

—山形県山形市大字長谷堂の場合—

山形大教育 金子 幸子

1. 山形市の西南約6 kmにある山形市大字長谷堂(旧南村山郡本沢村)内町部落には土間生活(室内で土間の上にもみがら, ごさなどを敷いて日常居寝の生活を行っている)の家が多く, 奇異に感じられる昭和27年に行なった調査結果は農村建築(1953年 No.19)に東北大小倉強, 佐藤巧教授とともに報告したが, その後の変化状態を知るため昭和40年に再度調査を行なったのでその結果を報告する。

2. 昭和27年時に土間生活をしていた内町の19戸と隣接部落二位田の10戸を対象として実地踏査および面接法により調査を行ない, 長谷堂周辺の地域は各地域の山形市役所出張所を通して実態を聴取した。

3. 長谷堂の母屋は台所ニワとヘヤの部分より構成さ

れるが、ヘヤの部分はナカノマ、ザシキ、ナンド、ゼンブのヘヤからなり、2室並列型、3室広間型、4室田の字型のいずれかに属する。13年間における変化状態についてみると、以前の土間生活戸数の36.8%は全室板張りに改造していたがその他は1～2室の土間のヘヤを残存し、そのヘヤは以前と同様にザシキ(接客、家族の寝室)が最も多く、ついでナンド(夫婦の寝室)が多い。改造の動機は養蚕、結婚、衛生意識の向上などによる。生産機構の変革に伴う生活水準の向上により、台所ニワの改造なども多く見られたが、まだ昭和27年時そのままの土間生活が以前の土間生活戸数の26.3%もあることは注目すべき問題点であろう。